内田百閒「虎」論
――〈言葉以前〉への志向――

Uchida Hyakken's Tora
―― Exploring the "prelingual" world ――

カテリーナ・オリハ*

KATERYNA Olha

（要旨）

内田百閒の「虎」という短編小説の特徴は、タイトルで示されている動物が直接に登場しないということである。そこにこそ大きい意味があり、本小説を読み解く鍵があると考える筆者は、小説中の虎をどのように理解すればいいかという問題を踏まえ、虎の〈分からなさ〉について考察していきたい。

語り手は以前虎に出会ったことがあると強調しているが、特別な表現方法に妨げられ、読者はその経験について確かな情報を手に入れられない。空間の語り方も、一見したところ、具体的な描写に見えるが、使われている言葉は読者の理解には役に立たないため、読者はその場所についても確かな情報を持たない。このように読者は完全な〈分からなさ〉の迷路に迷い込み、不安と恐怖を覚えることとなる。

本論ではこうした事情を踏まえ、〈言葉〉で示されている語り手の過去、経験、時間、空間とそれらの言葉の奥にある内容不足、さらにまた、虎という言葉とそれで表される何かの間の埋めようのない落差は何を表しているか、ということについて論じたい。

はじめに

内田百閒の「虎」は昭和12年12月に書かれた極めて短い小説である。興味深い作品であるが、『冥途』、『旅順入城式』、『百鬼園日記帖』、『阿房列車』等の先行研究が豊富であるのに対し、「虎」を対象にした作品論は見当たらない。しかし、この小説は短くても名作であり内田百閒文学の代表的な小説であるため、本稿においてその特質を追求する際に、内田百閒の他の作品についても触れ、それらについての先行研究を視野に入れつつ論じたい。

内田百閒は従来「漱石門下で芥川の友人」[1]と見られ、その代表作品『冥途』は漱石の『夢十夜』との比較において論じられて来た。その比較の出発点は、芥川龍之介が『冥途』について「悉く夢を書いたものである。漱石先生の『夢十夜』のやうに、夢に仮託した話ではない。見た儘に書いた夢の話である。」[2]という評価をしたことであった。しかし、夏目漱石との関係でよく論じられた内田百閒文学（特に『冥途』）に対して近年、次のようなアプローチもある。

> 文学史が、その対象とする時代・思潮が排出せしめた作家・作品の時代的系譜

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程３年（The Graduate School of East Asian Studies）

Journal of East Asian Studies, No.16, 2018.3.（pp.93-103）

づけをその主たる任務としている現在においては、内田百閒は文学史家の視野には入りにくいし、又入った場合でも、夏目漱石の門下としての位置を占める態度にとどまり、しかもそれによっては百閒の文学の内実は決して総括され得ないのである。[3]

本論文では内田道雄の上の引用文に同意して、「虎」を漱石の文学との関わりにとどめず論ずることとする。そのような態度を先駆的に示したのは、大谷哲であった。大谷は「内田百閒論　他者と認識の原画」で指摘した「『気分』としての小説」、「無意識」、「『死の不安』」[4]などのような、内田百閒の先行研究において通時的に変化してきたモチーフを乗り越えようとしている。その姿勢には筆者も共感を覚える。従って、筆者もまた「虎」に同様のモチーフを読み取ることに終始せず、さらに深くそれらのモチーフを生み出した起源を追求したいのである。

「虎」について論じる際、内田百閒の他の小説を視野に入れる必要がある。その原因は、「虎」という題名である。内田百閒の小説の中には動物（特に猫）を登場させたものがたくさんあり[5]、それらの動物は、虎と同様に、小説の題名となっている場合が次のように多数ある。

『冥途』には表題だけ拾っても『鳥』『蜥蜴』『豹』があり、『件』は文字の如く人面牛身の怪物である。その他『盡頭子』では人は馬に変身し、『短夜』では狐が女に化け、『石畳』では何百とも知らぬ牛が行列し、『白子』ではおびただしい黒犬が「私」につきまとう。『旅順入城式』ならば『猫』『鯉』『五位鷺』『水鳥』のほか、『波頭』の犬、『木蓮』の猫、『藤の花』の牛、『狭筵』の雷獣と、ほとんど数え上げる煩に堪えない。百閒動物園、というような言葉も自然に思いつかれるだろう。[6]

それらの動物についてどう解釈すべきか。その一つは、「頻出する動物たちが常に、人のアレゴリーとして、かつ人と溶け合う存在として把えられてある」[7]というものである。この考え方によれば、内田百閒の小説で動物たちは動物として語られ、「人と溶け合う存在」として動物と人という枠組みで捉えられる。しかし、筆者は、「虎」に登場する虎を動物として解釈すること、また虎を何かのアレゴリーと解釈することに疑いの目を向けるべきだと考える。もし、虎が何かのアレゴリーであるとすれば、当然虎は何のアレゴリーかという問いが提起されるであろう。そして、虎の意味について考察し、最終的には虎の正体を明らかにすることになろう。しかし、そのような考察によっては、本小説におけるもっとも独自な意味はかえって見失われることになるのではないだろうか。なぜなら、本小説に登場する虎は、単に何かのアレゴリーではないだけでなく、そもそも〈人間／動物〉の二項対立で捉えられるものでさえない。それはむしろ、虎という言葉を通して〈言葉以前〉の領域にまでさかのぼる極めて根源的な機能を孕んでいるのではないかというのが本論文の筆者の見方である。

そのような見方に立って、本論文では、「虎」の語り方に目を向け、語り手「私」はどのように小説世界を見、語っているのか、それを通じて創造されたこの作品の幻想性がどのような特質を持っているのかを明らかにしたい。

1．虎について

「虎」は極めて短い小説であり、そのストーリーも単純である。要約すれば、語り手「私」がいる場所に虎が来て、「私」の周りの人を獲る話ということになろう。表面的にみれば明確であるように見えるこの出来事には、しかし明確でない所もある。先に述べたように、それは小説中の虎をどのように理解したらいいのか、という点である。

小説の冒頭で、「私」は駅と思われる場所にいて、次のように語り始める。

> そろそろ汽車の通る時刻だと云ふことがわかつたので、線路を傳はつて來る響きに注意してゐたが、邊りにゐる人達も何となく不安さうであつた。
>
> 大概その汽車が通つてしまつた後で、虎が出ると云ふ話であつた。私は今日來たばかりで今までの事は知らないけれど、あまり面白い事ではない。ここいらの人人が、よくそんな事を我慢してゐられるものだと、不思議に思つた。[8]

「私」はまず「邊りにゐる人達」が「不安さう」であるということに気づく。その後、「虎が出る」という話を聞く。この箇所だけを見ると、別に特に不思議なことはない。虎のような動物が汽車に乗って通り過ぎる場合、それは確かにある程度危険な出来事であるから、その近くにいる人は不安を感じるということは自然である。また、ただ汽車が通り過ぎるだけではなく、その後で「虎が出る」という話であるから、「邊りにゐる人達も何となく不安さうであつた」ということも自然であり、異常とは感じられない。

しかし、再び上の引用文を読みなおしてみると、その人達は「よくそんな事を我慢してゐられる」とある。つまり、虎の危険を感じて不安に駆られた人達は、あえてその危険を避けようとせずに我慢するというのである。常識から見たら、このような態度は不思議であろう。

続いて虎が乗っていると思われる汽車が通り過ぎる。小説ではその場面が次のように語られる。

> そんなに氣にしてゐない間に汽車が通り過ぎた。振り返つて見たら、つないだ箱が不揃で、貨物も引つ張つてゐる混合列車であつたが、思つたより短くて、すぐに向うへ曲がつて見えなくなつた。
>
> 近づいて來る時は、まるで氣にならなかつたのに、そんな小さな汽車が通り過ぎた後、いつまでも地響きが消えないので、どう云ふわけだらうと思つたが、その内に、あつちこつちで人が二三人づつ立ち話しをし出した。
>
> 「今の汽車に乘つてゐたのではないか」
>
> 「私もそんな氣がする」
>
> 「今日は妙な方から來たものだな」
>
> 「そんな事ではないかと思つた」
>
> 「しかし、ちつとも時刻をたがへない。もうこれで何日續くのだらう」[9]

この中で、駅にいる人達の会話に注意しよう。虎が汽車に乗るということは比較的に珍しいが、異常ではないだろう。しかし、汽車が「妙な方から來た」という表現は何を意味するであろう。もし、汽車に乗る虎が、ある理由・目的で汽車で移送される動物を意味するとすれば、それが「妙な方から」来るというのは不思議と感じられる。詳しく言えば、汽車に乗る虎を日常的な生活で起こりそうな出来事として解釈するなら、その来る方向がどの方面からであっても、「妙な」という主

観的な評価が入るはずがない。そのため、虎を果たして文字通り汽車に乗る動物として理解してもいいのかどうかという疑いが生じるのである。

先に示したように、語り手は駅にいる人達が「よくそんな事を我慢してゐられるものだと、不思議に思つた」と述べる。それは、不安を感じながらも虎の危険から身を避けようとしない人間の態度が、私たち人間の自己保存の本能と矛盾するからである。しかし、不思議な点はそれだけではない。続いて、「ちつとも時刻をたがへない」と「もうこれで何日續くのだらう」という言葉がある。もし「虎が出る」や虎が汽車に乗るということが動物の移送を意味するとしたら、それが「何日續くのだらう」とか、時刻が決まっているとかいうことがどういうことなのか、極めて不思議に感じられる。

さらに後の箇所に目を向けよう。虎が来た時、語り手「私」は駅にいる人々と一緒になって、なるべく自分が目立たないように振る舞おうとする。その時、駅に集まった群衆の中の一人である若い男が、みんなの前で虎に獲られる。その後の状態を「私」は次のように語る。

> その姿が消えると共に、今まで四邊を石の様に硬くしてゐた氣配がゆるんで、次第に人人の間がざわつき、樹の影のはつきりした地面に、三人五人づつ人のかたまりが散らばつて、話し聲も段段賑やかになつて來た。[10]

この引用文から分かるように、その時駅にいた人々は自由に歩き、「賑やかに」会話をし始める。それは虎が来た時の緊張と明らかに正反対の状態である。虎の危険がなくなったら人々の緊張もなくなるというのは当然にしても、その直前には虎に一人の男が獲られるという事件があった。それだけではない。「その姿が消えると共に」という表現から考察するに、男の人が獲られている最中にはみんなはそれを無視し、その後お互いに被害者のことを全く忘れて気楽に話し始めたのである。このような態度は常識に照らせば極めて不思議であるため、虎と遭った駅の人々は一体どのような存在であり、彼らはどういうことを経験したのかという疑問が生じる。

つまり、虎とそれと関わる駅の人々にはいくつかの特徴がある。それらは、駅の人々は不安を感じても危険を避けないこと、「よくそんな事を我慢して」いること、虎が乗る汽車は何日も繰り返して時刻通りに通ること、地響きが消えないこと、最後に人々は虎の恐ろしい経験を一瞬にして忘れ去り、賑やかになることである。これらの特徴に基づいて考えれば、虎そのものと「虎が出る」ということは、動物の移送の際に実際に起こる出来事ではないと判断してもいいだろう。

だが、そう判断するとすぐさま、それでは虎とは何か、虎にまつわるこの一連の出来事をどのように理解すればいいのかという問題が生じる。だが、先に述べたように、筆者はこの問題に関して、アレゴリーを解くという方向で考えるべきでないと思う。むしろここでは、虎という言葉が用いられる意味は何か、ここに示された不思議さに孕まれた意味は何なのか、それについて考え、答えることにどんな意味があるのかという点に問題意識を向けたい。即ち、ここでの虎を、我々にとっての既知の存在としての動物に還元することなく、むしろその分からなさ、不思議さの意味について考察して行きたい。

2.〈今、ここ〉という舞台

本章では虎の問題から離れて、小説が語られる舞台すなわち〈駅〉と、語り手「私」とに目を向けよう。小説の最初の文章から、その舞台は〈駅〉であると分かる。「私」は他の人達と一緒に汽車を待っている間、他人の不安に気づき、「虎が出ると云ふ話」を聞く。このようにして、読者は初めて虎の存在に気づかされることになる。しかし、その次の「虎が出る」ということについて説明がない。なぜかというと、語り手はその場所に「今日來たばかり」なので「今までの事は知らない」からである。続いて「私」は周りの人々が「よくそんな事を我慢してゐられるものだ」と「不思議に思つた」と言う。「そんな事」とは「虎が出る」ということである。しかし、「虎が出る」こととはどのような出来事を意味しているのだろう。第２章で述べたように、ここでの虎は具体的な動物としては不可解であり、また「虎が出る」ということも、その動物が実際に汽車から降りて来ることとしては理解しがたい。虎がもし具体的な動物ではないとすれば、「虎が出る」ということの意味は不明であり、それについて人々が「我慢してゐられる」ことの意味も不明である。また、「あまり面白い事ではない」という表現の対象が何であるか、これも不明である。「今までの事は知らない」と語っている「私」が、「虎が出る」ということを我慢している人々について「不思議だ」と語るとき、それは何を意味しているのだろう。「私」は「今日來たばかり」と言うが、ここへ来たきっかけも目的も不明であり、「私」がどうしてここにいるのかも分からない。そのような多くの意味不明な箇所によって、読者は小説の初めから完全な分からなさの雰囲気に陥ってしまう。分からなさは小説の早い段階だけに現れるのでなく、その雰囲気は最後までずっと続いている。例えば、虎が近づいて来る箇所は、語り手によって次のように語られる。

> 近くに停車場があるのか、それとも走つてゐる途中から飛び降りたのか、それは解らないが、忽ち虎が來て、もうすぐ私共の身近かに迫つてゐることが知れた。
>
> 姿はまだ見えないけれどそれは氣配で解るし、私もかう云ふ目に遭ふのは初めてではない。どうしてこんな物騒な所に來たかと云ふ事を今になつて考へて見ても、兎に角虎がこの場を退いた後でなければ、何の役にも立たないし、今の自分の氣持で、また周圍の取込んだ騒ぎから、そんな事よりは早くみんなと一緒になつて、自分一人だけが目立たない様にする事が肝要である。[11]

虎が近づいて来るというこの場面においても、虎の正体が分からない状態は続いている。前に述べたように、虎が来る現象と虎そのものがこの小説の最大の謎であり、小説の中には虎に関する具体的な描写がないだけではなく、虎が直接に登場する場面もない。ここで言えることは、それらは何かを比喩したり、暗示したりしているのではなく、むしろ〈分からなさ〉そのものが表現されているということであろう。だが、それがどのような意味を持っているかについては、別の章で考察したい。

上の引用文でもう一つの興味深いところは、語り手「私」自身に関する語りである。「私」は「かう云ふ目に遭ふのは初めてではない」と言い、そのことから「私」が今までこういう状態を体験したことがあることが分かる。しかし、それは具体的にはどんな状態

であるかは、読者には分からない。このように、虎そのもの、「虎が出る」こと（つまり、小説で描かれた出来事）に関連づけて語り手の過去の体験を示す表現が使われているが、その表現の具体的な内容は不明である。

このように、語り手は駅に来る前にある経験をしたということだけを述べ、その内容を語らない。言い換えると、小説の舞台である駅すなわち小説の〈今、ここ〉で展開されるストーリーの過去に話が振られているが、過去の内実は述べられていない。その結果、読者は語り手が現在置かれている状態について一見分かるような気がするが、むしろこの小説における完全的な分からなさはさらに深くなるのである。

確かに、この小説の特徴の一つは、ここで一体〈何が起こっているか、分からない〉という読者の気分である。〈気分〉は、真杉秀樹が指摘しているように、〈夢〉と同様に、内田百閒の文学のキーワードの一つであり、内田百閒の小説は「“気分”としての小説」と見られても来た。[12]しかし、真杉が指摘するとおり、そのような見方によって「百閒の小説そのものの生成性、力学は少しも説明したことにならない」[13]であろう。真杉の指摘に強く賛成する筆者は、むしろここで完全的な分からなさの気分の根源に遡りたいのである。

小説の最初の段落に再び視線を向けると、語り手が駅と思われる場所にいる場面から小説が始まる。前に述べたように、来るきっかけや目的も不明であり、「私」はどうしてそこにいるのか、分からない。しかし、小説にそういうことが述べられていないことが、ここで〈何が起こっているか、分からない〉という気分を生むのかといえば、必ずしもそれだけではない。なぜなら、語り手が登場人物の様々な経験や行動の原因・目的を語らなくても、今という時点が成り立つためには過去や未来があることが暗黙の前提となっているからである。私たち人間は今という言葉を使う限り、その言葉は、過去や未来があるからこそ意味を持ちうる。今という概念は過去や未来がないと成り立たないから、今という言葉の意味には最初から過去や未来は含まれているのである。また同様に、ここという場所が意味をもつためには、ここ以外の場所の存在とそれとの関係が暗黙裡に想定されている。つまり、〈今、ここ〉を成り立たせるのは、その外部を構成する時間・空間の枠組みであると考えられる。このような認識の構造は、読者が小説を読む場合だけではなく、人間が世界を認識するそのしかたにおいても避けられないのである。

本小説に戻ると、「虎」の冒頭部分は、「そろそろ汽車の通る時刻だ」、「今日來たばかり」などと、語り手の今の叙述から始まる。しかしその叙述だけで、語り手が〈今、ここ〉の外にある過去の経験や駅に来る目的を語らなくても、今と二項対立を成す過去があるということは前提されており、それらを推測するのは人間の日常認識である。従って、ここでの問題点は単に語り手が「私もかう云ふ目に遭ふのは初めてではない」という表現で自分の経験を述べるように見えて、その内実を説明しないことにあるのではない。むしろそれ以上に重要なのは、ここで語り手がより積極的に読者の〈今、ここ〉に対する時間・空間の感覚を撹乱し、揺るがしてその安定性を失わせようとしていることである。それは、先の章で述べた、虎とそれと関わる駅の人々の描き方に現れている。具体的に言えば、駅の人々が虎に不安を感じても危険を避けないで「我慢して」いること、また、虎の乗る汽車が何日も繰り返し同じ時刻に通ること、通り過ぎた後の地響きが消えないこと、最後に人々が虎の恐ろしい経験を一瞬にして忘れ去

り、賑やかになること等である。これらのことから、先にはこれが動物の移送の際に実際に起こる出来事ではないという筆者の見解を述べたが、実は問題はそこにとどまらない。それらが読者を不安な気分に導くのは、虎の正体が分からないという事以上に、虎にまつわるこの一連の出来事が〈今、ここ〉という読者の時空感覚に混乱をもたらし、その世界認識の構造自体を揺らがすからではないだろうか。

「私」の語りは、過去によって今を措定すると同時に、過去と今の関係を撹乱し、今の意味を不明瞭にし、不安定なものとする。これは、ある物事を指していながら、それを否定する表現であるといえるが、それによって私たち人間の日常的な過去や経験の感覚が揺らぎはじめる。即ちこのような語り方が読者を日常の時間・空間の感覚と相違する状態に置くことが、「虎」という作品の不安・恐怖の気分の原因となっている。しかし、ある物事を指してからそれを否定するという語り方が用いられるのは〈今、ここ〉の表現だけではない。そのような語りの特質が最もよく表れているのは、実は虎そのものである。虎という言葉が使われているが、その言葉によって示されているのは実体としての虎という動物ではなく、読者には認識できない何かだからである。即ち、虎こそはこのような二面性のある語り方の至上の例なのである。

筆者は、虎の意味をアレゴリーを解く方向で考えるべきでないと述べたが、それは、そのように考えるとより根源的な問題が覆い隠されてしまうからである。むしろここで、虎を巡って展開される出来事の不思議さは、人間が認識し得ない未知の対象の意味を把握するための既知の枠組みに依拠するそのしかたに潜む分からなさ、不思議さであろう。虎という言葉を用いて定義できない何かを指し、読者の日常的な感覚における虎のイメージを揺るがす語りにはどのような機能があるのか、次にさらに具体的に考察する。

3．言葉以前としての〈虎〉

虎という言葉は一体この小説においてどんな機能を果たしているのであろう。虎と言われたら、その詳細は人によって違っても、私たちはみんな自分なりの虎を想像する。これは、人と人との間のコミュニケーションを支える基本である。そして、私たちは普通そのイメージから離れることができない。題名をはじめ、本小説にはうるさいほど虎という言葉が現れるから、読者は虎という動物のイメージ・概念によって、この小説で語られることが、小説が始まる前の段階ですでに分かったつもりになる。しかし、小説を読めば読むほど、語りによって虎のこのイメージが揺らぎはじめ、読者は結局何が起こっているか分からない状態に陥る。この分からなさは虎が間接的に登場する次の引用文に最もよく現れる。少し長くなるが、本論には省くことの出来ない重要な部分なので省略せずに引用する。

> 長屋の庇を取つた様な、或は學校の廊下に仕切りをつけた様な、細長い建物が、奥行の深い凹字形に竝んで、一ぱいに人が詰まつてゐるから、向う側に竝んでこつちを向いてゐる人の顔は、ちらちらして、どれがどれだか、はつきり見分けがつかない。しかし、あれはだれと云ふ事は思ひ出せなくても、大體まはりにいる人は、みんな私の顔馴染の様な氣がする。その爲に、かう云ふ場合、却て私は身邊の危險を感ずる様な、うろたへた氣持がして、他の人と同じ様に顔をまともに向

けてゐるのが不安であつた。

みんなの竝んでゐる頭の上は曖昧であつて、二階になつているのか、廊下が通つてゐるのか解らなかつた。庇がないので、はつきりしさうなものだが、人の所の事は別としても、自分の上が氣にかかりながら、判然しない。そこを虎が渡るのだと云ふことは、さう云ふ羽目になつて考えられるものではない。

しかし矢つ張りさうなる事は仕方がないので、凹字の向うの隅の邊りから、近づいて來る氣配はだれにも解つた。虎が走つてゐるか、立ち止まつたか、下に竝んだ一人一人を選り分けてゐるか、それは解らないけれど、ここにゐるだけの人が、みんな自分一人に迫つた事と思ふから、身動きも出來なくなつているのは、これだけ大勢の人が押し詰まつた中に、風のそよぎほども動くものがないので解る。だからなほの事、私の氣持が一寸動いても、すぐにそれが人中で目立ち、身のまはりがざわめいて、却つて虎を招く様なことになつてはならない。何か頭の上を壓して行く様に思はれて、はつとするその驚きすら、ただ一ところを見つめた儘で、私はぢつと抑へつけた。[14]

上の引用文の前半では虎が来る前の状態が述べられる。「私」は他の人と一緒にいる場所を語るとき、「長屋の庇」、「學校の廊下」、「細長い建物」、「凹字形」などのような、読者がすでに知っているような建物の具体例を使う。このように、語り手は自分の周りを丁寧に描写し、読者がその場所を明らかに想像できるように語っているように見えるが、実は違う。それらの言葉は実生活においてイメージしやすい建物・場所を指しているにもかかわらず、読者には小説の舞台はどのような構造を持ち、どのような場所であるか、分からない。「長屋の庇を取つた様な、或は學校の廊下に仕切りをつけた様な、細長い建物」とは、いったいどういう建物なのか、極めてイメージしにくい。そして「私」は、「奥行の深い凹字形に並んで」いる人の方向を向いているが、続いて「他の人と同じ様に顔をまともに向け」ないと述べるから、その場所にいる「私」と他の人たちは具体的にどんなポジションにいて、どのようにお互いに向いているか、最初から分からない。

このように、「虎が出る」前の場面にも、駅という場所はどんな場所であり、そこで何が起こっているか、読者にとって理解不可能なこととして語られる。語り手は読者みんなによく知られている言葉を使い、その場所を徹底的に説明しよう、読者に何かを伝達しようとしているように見えるが、それらの言葉を並べることによってだけでは、読者は小説の舞台をイメージできない。言い換えれば、語りによって空間は確実なイメージを失って揺らぎはじめ、上の引用文の表現を借りれば「曖昧であつて」、「はつきりしさうなものだが」「判然しない」。しかし、この小説において「判然しない」のは空間だけではない。前章で述べたように、語り手は自分の経験と過去に語りの中で触れ、指し示すが、それによって喚起される読者の〈今、ここ〉の感覚は不明瞭かつ曖昧で、日常の時間・空間の感覚とは異なる。つまり、時間の枠における過去や経験、空間の枠における場所という概念を説明するために語り手が並べた言葉はむしろ小説の〈今、ここ〉が揺るがすのである。

さて、上の引用文の後半に目を向けよう。この引用文でも、小説全体と同じように、虎は直接には登場しない。「私」が虎が近づいていると気付く、その根拠は気配だけである。読者にとっては虎の説明や描写が全く欠けて

いて、あるのは虎という言葉だけである。虎が近づいて来ると思われる場面で「虎が走つてゐるか、立ち止まつたか、下に並んだ一人一人を選り分けてゐるのか、それは解らないけれど」という表現がある。虎の動きを表すそれらの言葉は、語り手が実際に見た虎そのものではなく、語り手の虎のイメージを示す言葉である。それ故、語り手の虎の行動に対する、「走つてゐる」、「立ち止まつた」、「選り分けてゐる」という言葉は、実際に舞台で何が起こっているのかを知るためには役立たない。

このように、虎という言葉も、虎の行動を表す言葉も、前に述べた過去、経験、場所を指す言葉と同様に、それらの物事を指していると同時にそれを抹消する。虎という言葉を使う語り手が直接に虎を描写しない結果、読者の方では、この小説で語られる虎が読者のイメージとどこまで一致するのか、何が違うのか、一体虎という言葉が使われる根本は何であるのか、という疑問が生じる。確かなことが一つも述べられていない虎についての語りの結果、虎と虎以外の境目が揺らぐ。二項対立によってしか成り立たない言葉が、対立がなくなったら、言葉で構成されている私たち人間の認識構造を揺るがせ、〈言葉以前〉の領域に注目させる。

〈言葉以前〉とは何であろうか。私たちの人生のある領域、私たちが出会うある出来事、もやもやと感じている何かを言葉を使って表現しようとしても、言葉がそれ自体を表すことはできない。しかし、それにもかかわらず普通の生活の中で私たちは安心して言葉を使うことができる。なぜかというと、言葉を離れても物事は存在すると私たちは考えているからである。虎という言葉がなくても、その動物は存在する。そして、私たちは言葉の形を借りて、はじめから存在するものに名前を与えていると感じている。

本小説の語りは、言葉の世界で生きている人間のこのような感覚はどこかで間違っていることを示している。虎を分かったつもりになり、そのイメージを疑わない読者は、この小説を読むと、虎のイメージ・概念が揺らいでいることに気づく。虎に対して〈分っている〉という態度を取る読者は、やがてこの小説の虎が分からないことに気づき、不安を感じる。この不安の根源は、虎という動物に対する恐怖ではなく、完全な分からなさと出逢った恐怖である。虎とは言葉にすぎず、その向こうにあるものは〈言葉以前〉、認識不可能な〈カオス〉である。「虎」という小説は、その言葉の向こう側、言葉以前の領域を感じさせる。

「虎」という小説だけではなく、内田百閒の他の小説に目を向けると、そこにも言葉と言葉以前の対立が現れる。例えば、「件」という小説の最後の部分では件（人間の頭と牛の体を持つ生物）の〈三日目〉は語られないまま終わり、〈空白〉を作る。そして、それについて大谷哲は次のように述べる。

> 『件』の語りの戦略は、人間の共同体内部の概念を投影するものとして伝承を素材としながら、伝承において語られなかったこと（言葉以前）と、『件』において語られなかったこと（言葉以前）との対話関係の構成化を試みるものだとも別言できる。
>
> 「私」が、最終的に送り込まれている先は、伝承において完結したかにある、その物語性において背景化され、語られぬものとして横たわっている〈空白〉そのものである。『件』の物語世界は、その〈空白〉にこそ、物語の生成の力学を

> 認めることができるものである。人間の根源的な〈生〉と〈死〉の語られぬままの問題が、人間のみが可能とする「言語」をめぐる想像力の問題として開示される仕方である。それは、読者の想像力の投入・投影によって補完されるべき〈空白〉としてである。[15]

つまり、「件」で語られなかったこと（空白）にこそ意味がある。それは、物語が単に途中で切れるという空白ではなく、生と死が語られない空白である。「件」ではこの空白が、空白相互のまたは読者との対話関係を作り、読者の想像力における小説の読みを生む。

「虎」にも「件」と同じく空白はある。それは、虎とは何かという謎の答えを小説から読み取ることができないということだけではない。そうではなく、虎という言葉と、それで表されているクオリアにおけるイメージ・概念との間のずれである。私たち人間は安心して言葉を使っているが、本小説では言葉は安心して使えないほどそのイメージ・概念が揺らいでいる。虎という言葉を使っている登場人物・語り手・読者はその言葉の意味が分からないということに気づく。意味とは、私たちには到達不可能な言葉以前のものであると分かる。このように、認識不可能なもの、認識を超えるものを感じさせるのが、内田百閒の文学の特質である。

結論

この小説のタイトルは「虎」であるが、その言葉で示されている動物が直接に登場しないということに大きい意味がある。小説をまだ読んでいない段階でも、この小説のどこかに、何らかの形で、四つの足と縞の背中の動物が出現することを読者は期待している。それは言葉の力である。人間は普段その力を当たり前のことと思い、日常生活では言葉の深い特質に注目しない。

「虎」の語り手は様々な言葉を繰り返して使っている。一見したところ、それは読者とのコミュニケーションに見える。語り手は自分の経験、駅の空間的な構造、虎そのものを読者に伝えようとしているように見える。しかし、実は違う。たとえそれらの言葉を並べてはいても、語り手は経験、駅の空間的な構造、虎そのものは読者に決して分からないような語りを意識的に行っている。

語り手は以前虎と出逢ったことがあると言う。その経験があるということはなん度も繰り返し強調しているが、経験の内容が読者に伝わらないように語られている。「私」は「今日來たばかりで今までの事は知らない」が、それと同時に「虎が出る」ことは「あまり面白い事ではない」と述べる。このような対立する主張によって、読者はその過去や経験について確かな情報を手に入れられないが、それだけではない。駅という場所について、「学校の廊下」などのような具体的な比較の言葉が使われるが、それらの言葉は読者の理解には役に立たないため、読者はその場所についても確かな情報を持たない。しかし、それだけではない。時間・空間がこのように語られる結果、読者はその完全な分からなさによって〈今、ここ〉の感覚が揺らぐのに気づき、不安や恐怖を感じる。また、虎こそは他の何よりも読者の不安恐怖を生むものである。虎とは何か分からないと気づいた読者が、実は虎という言葉の向こうにある虎そのものに気づく。そして、分かったつもりであった世界は言葉の世界であるということの恐ろしさを実感し、言葉を超えた領域、言葉以前の〈カオス〉を予感する。それは、言葉を使うとしても、言葉が無効であるような世界だから、

読者はそれを感じるしかないのである。このような認識不可能な世界への志向は、内田百閒の文学の特色である。最後に内田百閒のこのような特色について、大谷哲の論文を引用しよう。

> われわれは、言語を用いて何事かを語ろうとする「物語」の欲望に憑かれた存在。言語以前、言語の外部とは語りえないもの。「語りえないものは存在しない。すべては語りえる」という態度を取るか。「語りえぬものには沈黙せねばならない」という態度を取るか。それとも「語りえないものをいかに語ろうとするか」という第三の道を選ぶか。

筆者は大谷の問題意識に深い敬意を抱きつつ、「虎」では言葉を通して「語り得ないものをいかに語ろうとするのか」、その具体的な仕方を解明しようと試みたつもりであり、そこにこそ本論文のオリジナリティーがあると思っている。もう一度最後に繰り返すならば、「虎」という作品は、虎という言葉を何度も使いながら、その意味が読者に分かっていないということを言語によって言い表そうとしたものである。そして、虎だけではなく、〈今、ここ〉という場所も、様々な言葉で作られている対象物も、私たちにとって意味不明なものにとどまるような書き方が意図的になされている。「虎」は明らかにそのような文学的実験を内包している。その具体的なメカニズムを述べることによって、筆者は大谷の指摘をさらに精緻に追求したつもりである。

〈注〉

1 真杉秀樹「内田百閒の世界　以文選書41」教育出版センター　一九九三年十一月五日　二十四頁
2 内田道雄「内田百閒ー『冥途』の周辺」翰林書房一九九七年一〇月二〇日　九十三頁
3 同上　五頁
4 大谷哲「内田百閒論　他者と認識の原画」新典社研究叢書二二四　平成二十四年一月三十日　十一頁
5 備仲臣道「内田百閒百鬼園伝説」皓星社 二〇一五年五月二九日　一四四頁
6 川村二郎「内田百閒論」福武書店　一九八三年十月十日　一〇七頁
7 内田道雄　前掲書　一〇七頁
8 作品の引用は全て『新輯 内田百閒全集』第六巻、福武書店、一九八七年六月十五日による。十八頁
9 同上　十九頁
10 同上　二一頁
11 同上　二〇頁
12 真杉　前掲書　三九－四〇頁
13 同上　四〇頁
14 百閒　前掲書　二〇－二一頁
15 大谷　前掲書一五九－一六〇頁